よびごえ

浄土真宗
仏光寺派
光明山
光善寺
〒915-0802
越前市北府２丁目 2-18
℡ 0778-22-1222

おとうさんと
おかあさんが
けんかした
さいしょ
おかあさんが
あやまった
おとうさんも
あやまった
いいおやたちで
よかった
そういったら
おかあさんが
なきだした

出石小学校一年
たなかひろみ

等活地獄（とうかつじごく）　『往生要集』

ここは亡者と亡者がとっくみあいの喧嘩（けんか）をやるところだそうです。亡者というのは死人でなくて、自我を自分だと思っている（自分が可愛いという心を野放しにしている）者を言うので、これは喧嘩になるわけです。自我と自我との衝突ですから、互いに譲りません。そして衝突しますと、肉はバラバラ、骨は粉々になり、血は飛び散るという修羅場で、誠に悲惨な状態になってくる。そうしますと、そこへ鬼が出て来て、鉄棒をドンと地に打ちつけて、「カツ、カツ（活）」と言うと、バラバラになったはずの体が、またもと通りになって、血も体の中をぐるぐる回って、ケラケラと笑うんだそうです。

なんと馬鹿な事を言っていると思われるかも知れませんが、こんなことは、私たちは日常くり返しやっています。たとえば、夫婦喧嘩をするでしょう。その時、「この野郎！お前みたいな奴は死んでしまえ」と思う。けれどもそう思った時に殺せば、自分が刑務所へ入らねばならんから、とどめは刺さない。それは、自分が可愛いというずるさから、わずかのところで思い止まっているわけであります。しかし、一晩過ぎた翌朝になり、顔を洗って食卓につく頃になると、「今朝のお汁は美味いなあ」と言って、ケラケラ笑っている。

みなさんはこんな経験がないからわからんでしょうが、ひょっとしたらこういうことに思い当たりませんかと、地獄の一つの形として問いかけられているのであります。

自我、自分が可愛いという心を野放しにしたら、自分も傷つくし、人も傷つく。わかってはいるけれど、その自我を絶対なくすることはできない。無くすことの出来ない自我を持ちながら、どうしてその自我を超えることができるか。それが親鸞聖人の一生涯の宿題であったと思うんですね。それには、なかなか無くせないところの自我を持っている自分が悲しい存在であると、自分を悲しむ。こういう形で、自我を持ちながら自我を超えられたのであろうと、こう思うわけです。…

米沢英雄師講話より
聞き書き